



電車に 乗れない



都会で生きていく
その代償は

春田 龍太郎

それはある日突然に

龍太郎は父親参観のため園児の姿を他のお父さんと共に並んで見ていた。

6月中旬の東京はすでに蒸し暑く連日遅くまでサロンワークに没頭していた龍太郎には湿った空気がひどく重く感じた。

息子は5歳、年長で来年は小学生だ。最近は生意気な事も言う時もあるが龍太郎にとってはまだまだ可愛い癒される息子だ。

「俺がああの頃はもう母子家庭になって母が姉と自分の二人を育ててくれたんだなあ。」

龍太郎は息子と自分の幼い時期を重ね回想し同時に自分も妻と息子を養い育てここまで来たと淡い充実感を味わっていた。

その並んでいた時だった。

「ん？どうした、足がすくむ」

龍太郎はゆっくりしゃがんだ。腰がしっかり下がる手前で右手にもっていたポーチで地面と軽く支える。自分の意志とまったく反する感覚。すぐに腰は元にあがり戻った。だが、すぐにまたしゃがんでしまった。今度は両手が地面についた。力が入らない感覚と地に足がついてない感覚がまじりあう。

ちょうどその時、園児達が休憩時間になりそれぞれの父のところに駆け寄った。龍太郎の息子、和志も龍太郎のところにニヤニヤと笑みを浮かべ感想でも聞きたい様子だ。

龍太郎が真っ先に和志にかけた言葉は「和志、トイレどこ？」和志は幼稚園のトイレを案内した。

龍太郎はその時は何も思っていなかった。足がすくんだのは疲労が重なったの事と軽く思うことすらなかった。

龍太郎は美容師で美容室を経営して6年、都内に2店舗まで経営するまでになっていた。龍太郎はけして器用でもなく特段な資質があったわけでない。そのことは龍太郎自身が一番よくわかっていた。ただ、美容師として一生懸命に情熱を注いでいたのは確かだった。そうでもしなければ、田舎から裸同然で上京し、下隅から独立し店舗を構え続ける事はできないのはいつの時代も同じだ。